

MfG_J_Ohinasaama_Tour_in_Nagaoka_town

MfG_J_Origin_of_Culture_in_Edo_Period を改変

長岡藩源流の文化を訪ねて（お雛様、茶道、銘菓ほか）

毎年二月中旬から三月上旬のイベントの、「越後長岡ひなものがたり」でゲストをご案内するための資料です。長岡市大手通をメイン会場とし、数か所のおひなさまの展示をご案内して周るときに、おひなさまに関する話題のほか、道中の「長岡まち案内」の話題を整理したものです。

目次

1. お雛様

- (1) 江戸の代表的文化区分とおひなさま
- (2) 有職雛と高倉流と山科流、次郎衛門鄙、古今鄙など
- (3) 雛人形の飾り方、左右の配置の変遷
- (4) "All about Japanese Hina Dolls" 国立京都博物館の英文説明コピー

(4) は、国立京都博物館のウェブページの英文での説明ですが、非常に簡潔な説明です。参考にコピーしたものを持ちました。

以下の詳細は、本サブラン酒ウェブページのなかの別ファイルに述べていますので、適宜、参照下さい。

尚、本ファイルでは、西川・蒲原舟道、新潟蒲原往来、長岡城町割りの寺院配置の図のみ、掲げました。

なお、英語版の「おひなさま」では、2章、3章について、説明したい要点を用語の和英対照覚書きを兼ねて、作成しています。

2. 長岡城と長岡町

- (1) 本丸、二の丸、三の丸、町口御門
- (2) 旧三国街道と町口御門
- (3) 町割り、寺町と防衛網
 - 別メニュー ----- 寺院は北陸・信州から、商人は三河、関東から
- (4) 新潟湊と西川・蒲原舟道、新潟蒲原往来
 - 別メニュー ----- 西川は西信濃川、現在の本流は東信濃川
 - 国道の桁数ナンバリング・システム

3. 戊辰の役、長岡空襲と現在

- (1) 幕末の長岡藩のスタンス
- (2) 復興と近代都市作り
- (3) 長岡空襲と復興
- (4) 長岡花火

1. お雛様

お雛様の始まり

雛人形の始まりは平安時代。宮廷にて、姫君や貴族の女性たちが、男女一対の「ひいな」にきれいな調度品を飾って遊んだことから始まったとされています。それに春の魔除けの風習が重なり、雛祭り。はじめは平台を配してお内裏様とお雛様を並べた親王飾りが主流で、段飾りが盛んになったのは元禄時代からのようです。

特に、おひな様の寛永雛、元禄雛などの様式変化が、寛永・元禄・享保という江戸時代を代表する文化区分とぴたりと一致しているということで、雛様が、単なる人形の枠を超えて、文化を代表するものだったということに感銘を受けました。

城下町長岡と、現在の長岡についても触れながら、ご案内したいと思います。

(1) 江戸の代表的文化区分とおひなさま

・寛永雛、元禄鄙

室町時代は立ち雛が主流でしたが江戸初期に坐り雛が考案され、装束をつけた雛が誕生、しこれを寛永雛(1624～1644)と呼びました。特徴は頭は冠と共に一木造りで耳が大きく作られていることです。元禄年間(1688年～1704年)に登場する元禄鄙は、寛永雛より少し大きくなりました。女性のおひなさまは、寛永雛が手を左右に広げているのに対して、元禄鄙は手を前に合せるようになりました。

・享保雛

(享保年間 1716～36)1700年代から雛人形は急激に大きく豪華になって、(高さ36センチから1メートル位のもある)豪華絢爛たる内裏雛は町家(豪商・豪農)で好まれました。享保6年の幕府の出した触書により大きさを8寸(24センチ)以下と定められたほどです。髪はすが糸で植えてあり、男雛は冠をかぶり、女雛は装飾のある金属の冠をかぶります。

衣裳は金襷(きんらん)や錦(にしき)をつかった豪華なもので、男雛は束帶(そくたい…昔の朝廷の正式の礼服)に似た装束で、手に笏を持ち、太刀をつけています。

女雛は五衣(いつつきぬ)・唐衣(からぎぬ)に似せた装束で、袴のなかに綿を多く入れて丸くふくらませ、宝冠(ほうかん)をかぶり、檜扇(ひおうぎ)を持っています。

・古今雛(こきんびな) ~ 享保雛以後新しく工夫された町雛の総称。

古今雛は、明和(1764～1772)のころ、江戸の上野池端の大槀屋が十軒店の人形師、原舟月(しゅうげつ)に顔を彫らせて売り出したといわれています。

写実的な顔と、見た目のきれいな装束が人気を集め、江戸ばかりでなく京、大阪でも大いにもてはやされました。

寛政(1789～1801)の頃、江戸の人形師、原舟月が、古代雛を参考にして考案した雛人形は、目の玉に水晶やガラスをはめ込むなど、つくりも精巧、写実的。

(2) 有職雛(ゆうそくびな)と高倉流と山科流、次郎衛門鄙など
有職雛 流派に高倉流、山科流。 下記の三種類のひな。

直衣ひな 貴族の普段着

束帯ひな 直垂が前に垂れている

狩衣ひな 縛ることができるように、肩、袖に紐がある

一般の雛人形は、見栄えの良いようにつくられましたが、公家(くげ)衆の装束は、身分や年齢、季節によって違うので、公家衆の実際の礼式にかなうように正しく調べてつくられたのが有職雛です。

宝暦(1751～1764)のころつくられましたが、一般に売り出されたものではなくて、公家衆が特別に注文してつくらせた雛です。朝廷に仕えて、公式の装束の製作を受けもっていた高倉家、山科家に衣服をつくらせたことから、はじめました。

源有仁公創案の衣紋道は、その没後に藤原北家の大炊御門経宗と徳大寺実能に伝えられました。しかし、大炊御門家では三代で関心を失い、衣紋の技は助手をしていた高倉家に渡りました。もう一方の徳大寺家は三代目に猶子に入った実教が熱心に励み、彼が山科家の始祖となりました。

こうして鎌倉・室町時代に、現代にも伝わる衣紋道の二流となったのです。

高倉流は、江戸・宝暦年間(1751-1764)頃より、公家の装束を故実に正しく検証して作られたひな人形。特別に織り上げた裂を使用していること。高倉流の牧野ご当主は、衣紋道研究会会長を継続されています。

有職雛の特徴 眉毛をそり落としている

～ 既婚者は眉毛を落としお歯黒である。

次郎衛門びな ～ 丸顔に、鼈目鉤鼻。女雛は、肩に「かけ帶」～豪華な衣装

江戸時代中期に雛屋次郎左衛門という人形師が創始したことからこの名があり、団子のような丸顔に引目鉤鼻という、源氏物語絵巻に描かれるような面貌が特徴的です。

雛の本流として、流行に左右されず公家や大名家に好まれたと云われています。

(3) 雛人形の飾り方、左右の配置の変遷

一般的に「殿」と「姫」を中心に飾り、「屏風」「雪洞」「三宝菱台」「桜橋」を飾ります。親王飾りはお内裏さまとお雛様だけのシンプルなものです、その分衣裳や、後ろに置いている屏風が際立つ作りとなっています。高級な西陣織金襷、唐織、天皇のみが着ることを許される鞠塵、友禅などの華麗な衣裳を着付けしたものや、豪華な蒔絵風の屏風を飾ったものもあります。

殿は向かって左に置き、姫を向かって右に置いて飾ります。

しかし京都では現代でも皇族の並びの、いにしえの礼法で逆に飾っています。

五人囃子、五人雅楽 どちらが早いか不明だが、三人官女よりは時代が古い。

しかし、三人官女の方が上段に飾られるようになり、今は、上から二段目の上位位置。

五人囃子の並びかた

向かって右から左に、だんだん大きな音がだせるように服装も変化する。

(太鼓をたたくなど、脱いでいくようになる)

京雛では向かって右がお殿様、関東雛では向かって左がお殿様です。
もともとお雛様が女性の持ち物で結婚と共に移ることから、必ずしも日本全国で左右の動向が一致しているわけではないそうですが、一説には以下。

京雛の位置は、御所における玉座の位置に基づいています。

関東雛で、お殿さまが左側になったのは、明治になり、西洋の流れを受けて国際儀礼である「右が上位」の考え方を取り入れられるようになったからと云われています。

(大正天皇が即位の礼で、洋装の天皇陛下が西洋のスタイルで皇后陛下の右に立たれた事からこの風習が広まったとされています。)

また好まれる顔も関東関西に違いがあります。

関東は目が大きめで口元がかすかにほころびふくらした可愛らしいお顔が人気ですが、関西では切れ長の目に鼻筋の通った高貴なお顔、細面のいわゆる京美人が好まれるそうです。

実際のところ、なかなか顔立ちから関東雛と京雛判断するほど明確な顔の特徴はつきりしていませんが、雛人形の商品ごとに、そのお顔は随分と違うことは比べてみると良くわかるものです。

お雛様と町歩き 個別の展示説明

アオーレ(ホワイエの今町・小国コラボ)、市民協働センターの市内趣味の会)、
市民協働センターでは、ひな祭りのパッチワークのタペストリーが展示されています。
長岡市内のパッチワークのサークルの手作りタペストリーです。

カーネーションプラザの保育園作品

グランドホテル(牧野家のおひな様)、
牧野家と藤堂家、高倉家

現当主忠昌氏の祖母は藤堂家から、母は高倉家からお嫁入り。
アオーレのお雛様は、その祖母様がお若いころ、藤堂家から贈られたもの。
高倉家からのお嫁さんの縁から、牧野家は高倉流の流派を継ぎ、公家の衣装を
を監修する立場にある。先年の2013年、伊勢神宮の式年遷宮の装束も、監修。

2018年配置、左側のおおきなおひな様

真ん中のものが、井伊家の家来の家に伝わっていたもの。
女雛のお顔がなかったが、復元した。
井伊直弼は安政7年3月3日(1860年3月24日)に暗殺。
以後、お雛様をまつるのは、廃止したらしい。

かも川本館のおひなさま

説明書きに高倉雛
江戸・宝暦年間(1751-1764)頃より、公家の装束を故実に正しく検証して
作られたひな人形。特別に織り上げた裂を使用。
各客室に、それぞれふさわしい飾り。

ギャラリー沙蔵(元禄・享保びな他)

沙蔵の土蔵 2017年が築100年、T6建造
もとは呉服屋、道路拡張に伴い、東面を北面に「引き屋」で移動した。
沙蔵のおひなさまのなかに、彦根藩家中伝来のものがある。
(一階の中央に飾られている)
ガラス眼
江戸末期以降、ガラス眼が使用されるようになった。
(沙蔵の店主の話)

山本五十六記念館の元禄雛

河井記念館 井伊家本家から与板藩分家に明治時代初期(与板10代、11代)の
ころに贈られたもの

幸町の「さいわいプラザ」内の自然科学博物館

牧野家伝来の雛飾りを公開されることがあります。

牧野家が京都におられたころの飾り方が展示されることもあります。

(昭和47年に京都府立総合資料館(現京都府立京都学・歴彩館)で展示)

三組以上の、各々豪華な雛段飾りの大集合ですが、藤堂家、蜂須賀家などからの、歴代の夫人の持参品とのこと。

当時の「遊び道具」の精緻なしつらえもあり、素晴らしいの一言。

こんなに手の込んだ、厳かなミニチュアが、当時作られていたことに驚く

ホテル ニューオータニ長岡

建物込み、組み立て式の、巨大なもの

筒描き (ギャラリー沙蔵)

筒描き染めの一番の魅力は、大らかでのびのびとした文様の躍動感と流麗さだとよく言われます。

筒描きに用いる『防染糊』が使われ始めた歴史はかなり古く、奈良・鎌倉・室町中期時代頃との事です。

『防染糊』の発生には、当時の日本の食生活に密接な関係があります。

当時の主食のいろいろな穀物のなかで、稻の米・糯米の粘着性に着目し、粘着力を高める技術が考案され、物と物を接着させる『糊』に加工されました。

この『糊』は織りには茶屋染めや友禅染めの糸目糊に、型染めでは模様染めの防染糊として用いられてきました。

しかし、筒描きという染色法の始まりについては、まだ詳らかではないようです。

ただ、その魅力が一番華やかだったのは江戸時代ではないかと思います。

世界の染色のなかで糊を防染手法に使うのは、中国の印花布を除いて

日本以外にほとんど見ることがなくおかげで他に例を見ない、

筒描き独特の風合いと、躍動感を持った独自の染色文様が生まれました。

(沙蔵の店主の話)

Every year on March 3rd, Japan celebrates the Doll Festival (Japanese, Hina Matsuri). Until recently, Girls' Day was also celebrated on March 3rd. On this day every year, families set up a special step-altar on which to arrange their Emperor and Empress dolls, called "hina" in Japanese. They decorate this altar with boughs of peach blossoms and make offerings to the hina dolls of freshly made rice cakes (mochi), either flavored with a wild herb or colored and cut into festive diamond shapes.

In addition to dolls, these altars display many beautiful and luxurious decorative accessories. Look again carefully at the three altars. Can you see any things displayed on the two altars made in Kyoto that are not on the altar made in Tokyo? The Kyoto-made altars have miniature kitchens and hearths for cooking. You will never see such objects on altars made in Tokyo because kitchen implements are a specialty of doll sets made in Kyoto. Tokyo dolls have their own specialties too; doll sets from Tokyo are tall with many steps. They also have many chests, shelves and other furnishings to display with the dolls. This kind of lavish exhibit is a Tokyo tradition that has been handed down since the Edo period. In fact, Edo is the old name for Tokyo. In the old days, you could quickly see the difference in style between doll sets made in Tokyo and those made in Kyoto. Today, however, these differences have almost disappeared.

Do you know when the tradition of displaying hina dolls on March 3rd began? Because the dolls are dressed like court nobles from the Heian period (A.D. 794–1185), so you might think that the Doll Festival is a very old holiday. In actuality, however, the festival did not begin till the Edo period, in the 17th Century. The third day of the third month of the year was a holiday in Japan before that time, but there are no earlier records of doll displays on this day.

The Edo period began in about A.D. 1615 and continued for about 270 years until 1868. Many different kinds of dolls were made over this long period of time. Dolls that are standing up are called tachi bina, or "standing dolls."

Standing dolls are a very old type of Japanese doll that continued to be made during the Edo period.

Dolls that are sitting down are called suwari bina, or "sitting dolls." Sitting dolls evolved during the Edo period. There are many different categories of sitting dolls based differences in form, face shape and clothing.

The oldest type of sitting doll is called "Kan-ei bina." Look at the picture of two Kanei bina below.

The Kan-ei bina are little dolls. The Empress doll has her arms spread apart, but her hands are hidden inside her sleeves. She wears a very old style of Japanese outfit, with a pair of wide culotte-like trousers called a hakama over her layers of kimono.

The second-oldest sitting doll category is the "Gen-roku bina." Look at the picture of a set of Genroku bina below.

They look somewhat like the Kan-ei-bina, but they are a little bigger. Can you see the difference between the Empress Gen-roku bina above and the Empress Kanei bina? Do you see how the Gen-roku bina is holding her hands out in front of her? Her clothing is different too. She is wearing an outfit similar to the twelve-layered court costume of the Heian period, called a juni hito'e.

In the years to come, the size of the dolls grew as a new kind of hina doll, known as the Kyoho bina, became popular.

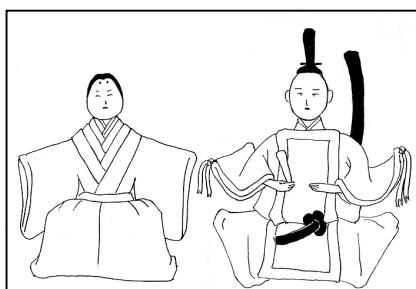
These Kanei bina and Genroku bina were made in the 17th century, during the first half of the Edo period. At this time, the dolls came in sets of one or two and were displayed simply on a low, one or two-stepped platform with a "hina screen" behind them.

Other popular dolls were the round-faced "Jirozaemon" and the "Yusoku bina," whose costumes perfectly reflect the special clothing worn by courtiers.

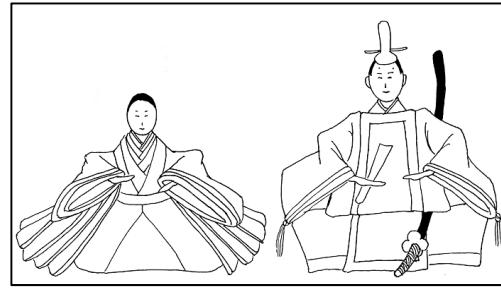
By the late Edo period, it became popular to decorate the top steps of the altars with lavish pavilions. In Edo (Tokyo), the doll altars were often built seven or eight steps high! By the time the "Kokin bina," shown below, became popular, it had become the tradition to display other dolls below the imperial pair. Among these were the Three Court Ladies (Sannin Kanjo) dolls and Five Musicians (Gonin bayashi). Their additions made the Doll Festival displays more lavish than ever, creating a style that is still seen today.

Text by Shigeki Kawakami, Department of Applied Arts

English translation by Melissa M. Rinne, Department of Archives



Kan-ei bina



Gen-roku bina

西川・蒲原舟道、新潟蒲原往来

西川の由来

400年程、この西川は信濃西川、現在の信濃川は信濃東川と呼ばれており、直江工事をきっかけに信濃川の主流が次第に東川になったという。

その後、次第に西川は用水の供給を主とする河川となった。

現在の一級河川西川は燕市大河津で信濃川から分派し、新潟市西区平島で信濃川に合流している。過去に西信濃川と呼ばれていた記録もあり、直江兼続の直江工事以降、信濃川が幾度となく流路を変えたなかで、一番西側を流れていたときの跡であるとも言われている。

西川の水運

以前、西川は新潟港と西蒲原地域を結ぶ動脈だった。江戸時代には蒲原船道と呼ばれる川船株仲間が36隻の大型川船を使用して西川舟運に従事していたらしい。年貢米や商人の荷運搬のほか渡し船もあり、明治時代には新潟から吉田(現燕市)まで蒸気船が運航していたときもあった。

現在は、舟運はなく、主として上水道、かんがい用水の供給など利水面で地域にとって貴重な河川となっている。

蒲原舟道

寛永年間(1624-44)の家光の時代に成立。

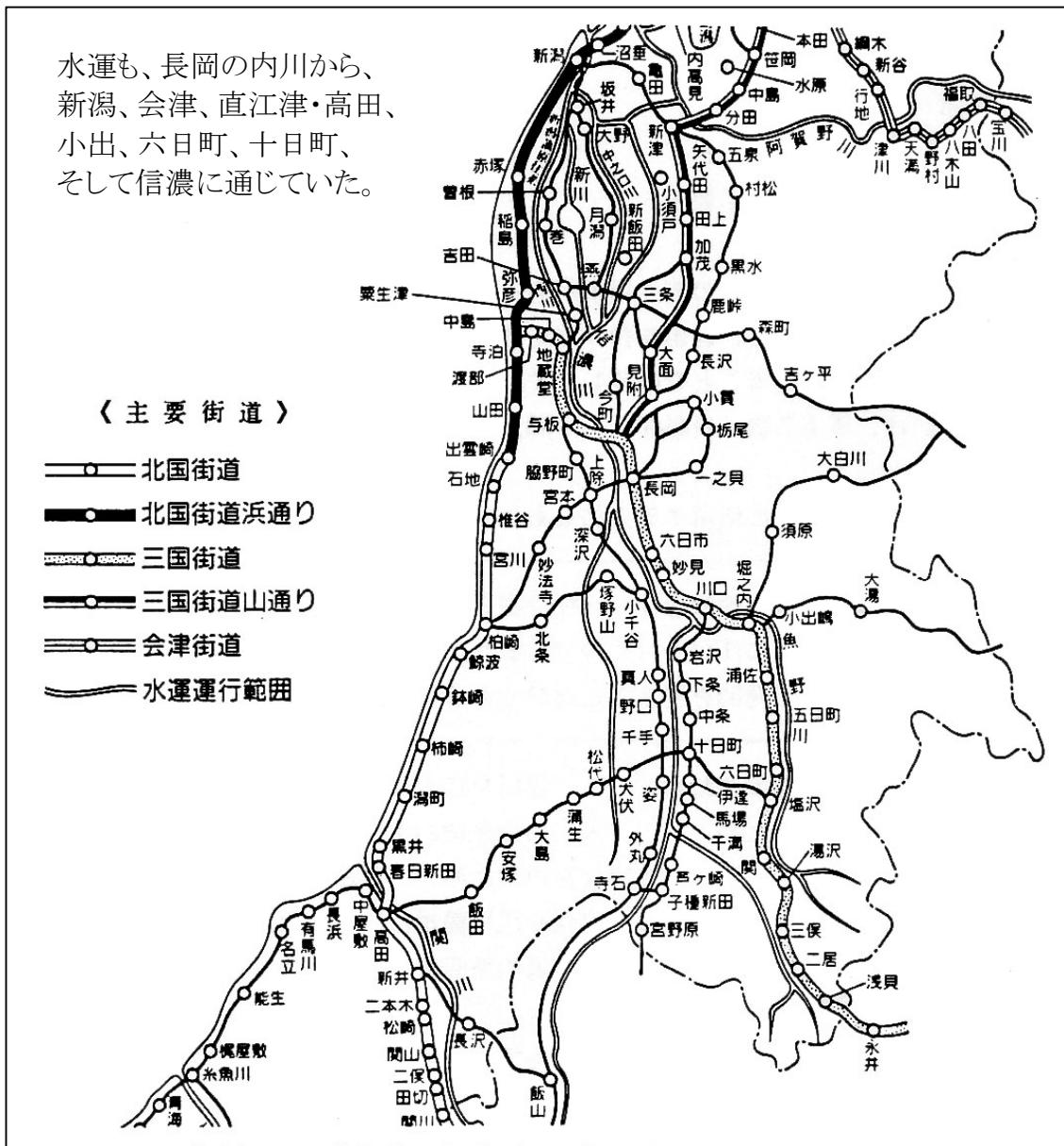
最初のころは新潟が運用していたが、長岡・西福寺が運賃米の中から五斗づつ藩に上納するという約束で年貢米の輸送を引き受け、蒲原舟道から西福寺に管理が移り、その翌年から長岡舟道がやることになった。これが50年続き、また蒲原舟道が担当することになったという。

北国街道横道としての新潟蒲原往来

北陸道は、古代より都から北陸地方を通り、越後から佐渡に通じる道。江戸時代には北陸街道と呼ばれるが、この時は加賀の金沢から越後の高田まで。高田から出雲崎・弥彦を通り、新潟湊までが北国街道と呼ばれていた。

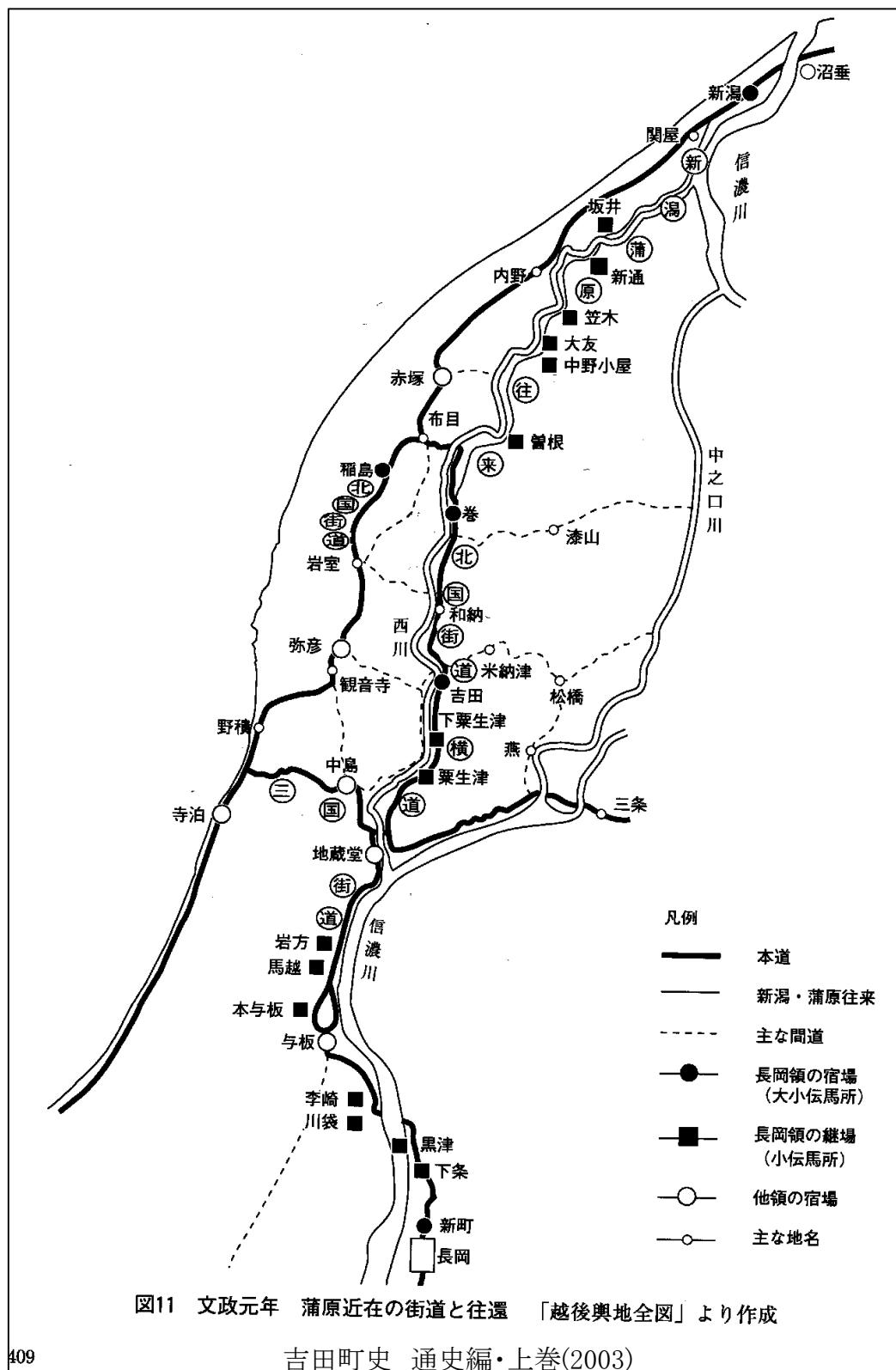
地蔵堂から西川沿いで新潟湊までの道は、北国街道横道・新潟蒲原往来と呼ばれた。現在の国道116号線は、この道の東側にほぼ平行した道路である。そして柏崎で、国道8号線に合流する。

越後の舟道と街道の図



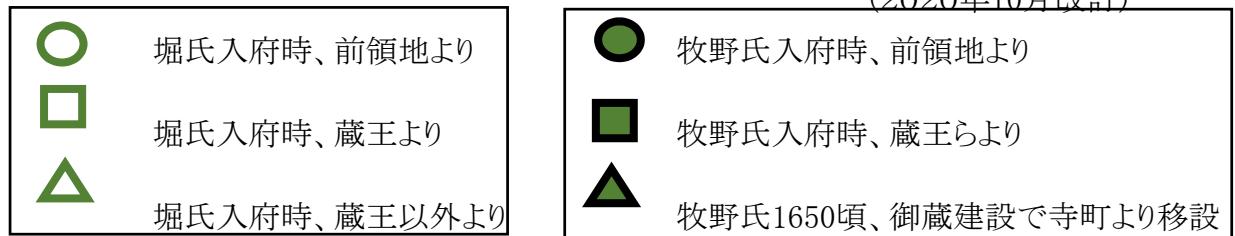
長岡市史 通史編 上巻

街道図



2. 堀氏、牧野氏による長岡城の町割り、城下の寺院配置

(2020年10月改訂)



○、□、△の白、緑で。堀氏、牧野氏の順に、前領地より、蔵王より。それ以外よりの移転を示します。堀氏の時代、まず大手門のラインより下流側の防衛線を先行で確保したことが読み取れます。何らかの意図があったと思われます。

